書　評

Gerald and Patricia Mische, *Toward A Human World Order, Beyond the National Security Straitjacket*, New York, Paulist Press, 1977, pp. 399.

著者ミッシェ夫妻

著者と出あうことは，その本についての親しみをわかせるものである。著者との出あいは，活字の間にある空間に人間的ないぶきをふきこむ。本書の著者ミッシェ夫妻は1979年6月と1980年4月に来日され，日本の各地で平和研究や平和運動に関心をよせている人たちと親しく話しあうときをもたれた。とくに京都では，従来から継続して関西セミナーハウスでもたれていた平和研究会のグループと寝食を共にしながら話し合う体験をもった。御主人のゲラルドさんは，第二次大戦の経験から，人類は現在危機的な状況にあることを痛感し平和運動に生涯を献げる決意をされた。パトリシア夫人は，アフリカで教育活動に従事した経験をもっている。二人とも，コロンビア大学の国際関係学部で学び，国際政治や国際経済，そして国際的文化について広い知識をもち，きわめて多様な情報を的確にまとめて提示する能力をそなえている人びとである。

しかし，本書を読み，さらに著者に接して感銘することは，著者たちの国際問題についての単なる該博な知識ではない。むしろ，その人格の奥底にある平和についての献身と，きわめて実践的なプログラムを提示する現実的な視点である。夫妻は，米国のシートン・ホール大学において国際関係論を講じているが，その中心的なエネルギーは，ニュージャージーに本部をおく世界教育連盟の仕事を推進することに注がれている。ゲラルド・ミッシェ氏はその所長であり，パトリシア夫人はその有力な役員である。世界教育連盟は，北米，ヨーロッパ，アフリカ，南米，アジアに支部又は，連繋グループをもち，世界的に平和教育を展開している。

先述の二回にわたる日本の訪問は，アジアの各地に関連した平和教育グループと提携するためであった。すでに，インド，フィリッピン，韓国，日本などにおいて，連繋グループが結成され，相互の情報を交わして，活動がなされている。本書は，ミッシェ夫妻のそうした研究と活動から生れたきわめて現実的な平和論の具体的な提唱である。

現実的平和論

平和への人類のねがいは歴史の中に尽きない叫びとしてこだましつづけている。一面からいうなら部族と部族の対立が弱肉強食のように行われていた原始社会から，諸侯の支配圏の間の葛藤がくりひろげられた封建時代を経て，近代国家が成立し，それを単位にした力の均衡が基盤となった近代に至るまで，人類の歴史は，征服と戦争の歴史であったとい

っても過言ではない。しかし，そのような，暗い殺戮と破壊の谷間にも，絶えず平和を志向するさまざまな人びとが，呻きながらも，望みをもって平和への道を歩んできたことも事実であった。それらの人びとは，人類からいえばごく少数者であった。しかし，内に一つの信念をもって，平和的手段を通して問題の解決を志向した人びとであった。多くの場合，クエーカー教徒やメノナイトや兄弟団（ブラザレン）の人たちや，マハトマ・ガンジーやマルチン・ルーサー・キングのように宗教的信念に触発された人たちが多かった。

宗教家が平和運動に携るとき，陥りやすい誤りは，観念的になったり，現実を離れた理想主義に走ることである。いかに深く宗教的信念に立脚していても，現実的な把握と洞察に欠けるとき，広い説得力をもった運動となり得ない。理想主義的なユートピア思想や教條的な誡命はそれなりに意味がある。しかし，歴史を動かす現実的な運動とはなり得ない憾（うら）みがある。ここに平和論が具体的な力の均衡や経済や資源問題のきびしい現実をふまえて展開されなければならない所以がある。

第一次大戦後，米国では平和運動が盛んであった。それは，悲惨な世界大戦の結果をまざまざと経験した人びとの反省と決意から広く支持されていた。なかには，真摯な宗教的信念をもった人もいたが，多くは，人間的な善意と感情に根ざさしていた。ところが，ヒットラーがナチスの旗印のもとに出現し，欧州の各地を席捲するに及んで，広汎にひろがった平和主義の潮流は，ひいてゆく岸辺の波のあわの様に消え去って了った。ごく少数の宗教的に決意した平和主義者を除くなら，多くは，軍備の拡張と戦争への参加をやむを得ないものと肯定し，終りには拍車をかけて戦争の遂行にあたっていった。その結果が，真珠湾であり，広島，長崎であった。現実的な力関係や国際関係の均衡分析を伴わない平和論は，積極的な変革の構造を欠如していることを示している。もちろん，この期間において，良心的兵役拒否者（C.O.）として，宗教的信念に立つが故に，戦争に参加することを拒否した人びとのあったことも事実であり，すでに英国や米国においてそれらの人びとの人権が法的に認められていたことも忘れてはならない。しかし，E・H・カーが『20年の危機』において指摘したように，第一次大戦から第二次大戦に至る変化には，今日われわれが学ぶべきものがあるように思う。ラインホールド・ニーバーはこの間に理想的平和主義から現実的政治論に移行していった代表的なケースである。

ひるがえって，わが国の平和運動の状況をみるときに，それは，第一次大戦後の米国の平和運動にやや類比した理想主義と人文主義の色彩が強いように思う。そこには拭うことの出来ない戦争による被害と傷手からの直接的な叫びがあり，それが願望としての平和運動に結晶していった。そこには平和へのパトス（情熱）は強くあったが，冷徹な分析と深い決意を伴ったロゴス（真理）への献身がさらに必要であった。さらに，自分を被害者として破壊をもたらした加害者へのプロテストは強くあったが，日本人もまた，戦争の犠牲者であると同時に，自分が加害者であり，侵略者があったという反省はきわめて乏しい。だから，戦争の責任は他者に転嫁され，自分の責任を問う主体的な姿勢を欠きがちである。こうした点から，平和運動が拡がっていることは事実であるが，それが，どこまで主体に根ざし，どれだけ現実的視野をもって展開されているかが問われなければならない。

そうでないならば，昨今いわれているような，再軍備や憲法第9条改正などの潮流に流されてゆくことになりかねない。平和運動は，主体的価値観に根ざし，理想主義に走らず観念論に陥らず，現実的な国際社会の構造分析と具体的展開をなす説得力をもたねばならない。こうした点から，現実的平和論を説く本書の分析と洞察とはきわめて示唆に富んだものであると云えよう。

国家安全保障拘束服の脱皮

『人間的世界秩序』を主題とする本書には副題がある。それは，「国家安全保障拘束服を越えて」(Beyond the National Security Straitjacket) という考えである。著者は，現在の世界において，何れの国も「国家安全保障」という「拘束服」を着ており，それにがんじがらめに縛られているのが現実であり，それをゆるめ，ほぐしてゆくことなしには，現実的平和運動はあり得ないとしている。各国は，いわゆる自由主義圏の国ぐにも，社会主義の国ぐにも，国益を優先して，国力の維持，拡張に向かって努力を続けているが，今日のように地球が一つの相互依存関係をもってくるとき，一国の課題は相互の国々に関連しており，地球全体の相互関係から考えなくては，解決されなくなっている。このことを著者は，軍事的力の均衡，貿易収支の均衡，環境ならびに資源の確保という三つの次元から詳細に分析する。（第2章，第3章）

「国家安全保障」という「拘束服」がある限り，自由主義体制であろうと社会主義体制であろうと，「開発途上国」であろうと「開発した国」であろうと，平和を個人的に願望することは出来ても，具体的な政策として推進することは出来ない。そこから軍備，経済，資源の三分野にわたって，地球全体から相互の共存的連繋を考えてゆくプログラムと戦術を提示しようとするのが本書の主要なねらいである。

人間的世界秩序とその戦術

著者は，今日の地球時代は世界的危機の時代であると同時に，それは，相互の連帯性を意識し世界秩序へと向う好機であるとする。なぜならば，地球全体的視点と協力なくしては，それぞれの国の課題は解決されない現実となっているからである。

著者は，ローマ・クラブのような形の少数のエリートの学者たちによるリポートに解決の主役を見出そうとしない。エリートによって歴史を変革する時代は終ったというのが著者の信念である。著者が注目する世界秩序建設の主役は「民衆」である。それぞれの国のわくを越えて，多様な民衆の組織が連繋し，それを中心に，教育家，技術家，宗教家そして各種の専門家の多国籍的連繋活動が促進されるべきことを提唱する。

これは，いきなり世界連邦の建設をめざす理想主義的な運動ではなく，多様な民衆の連繋を拡げることによって，多国籍的構造の漸進的発展による体制変革をはかるものである。著者は，ポール・フレーリーなどの主唱する，主体的なめざめと参加をおしすすめる解放理論を高く評価しながらも，それが国際的連繋と世界秩序をめざす視点をもたないならば，抑圧者と被抑圧者の関係を是正することは困難であるとのべている。そして，支配者が抑圧的体制をとらざるを得ない構造的原因を是正しない限り根本的解放はあり得ないと考える。まさしくそれが，国家的安全保障拘束服であり，それが至上目標であるかぎ

り，善意の指導者が国の為政者となっても問題は根本的には変らないとする。自国の国益しか考えないところに，今日の悪循環の根があり，それを克服するために，一足とびに世界連邦を夢みるのではなく，現実の一つ一つの問題をめぐって，民衆の多国籍的な連繋がとられ，それをめぐって教育者，技術者，宗教者そして，諸種の専門家たちの連繋が進められるという方向を提示している。いわば，草の根からの問題に焦点を合わした世界秩序づくりの戦術といってもよい。悪循環はそこからしかたち切れないところに来ているのかも知れない。

宗教の役割

著者は，宗教は本来「結び合わせる」(religare) という意味をもっているということを指摘し，「世界秩序と真の宗教」（第12章）という章をとくに設けて，宗教の役割を論じている。著者はおおむね，キリスト教の立場をとっているが，ここでいう真の宗教とは，キリスト教のみでなく，仏教，回教，ヒンドウ教など世界の諸宗教を含んでいる。世界秩序へと向かう歴史過程で，国を超えて，民衆と民衆を結びつける働きをするものとして世界の諸宗教の役割を力説している。

著者はまた，マルクスが「宗教は阿片である」といった宗教批判を回避せずに，宗教がこの世界における使命を喪失して，狭い宗教的領域に自分の働きを限定したり，来世のことのみを考えるなら，宗教は阿片的になることを認める。しかし，本来の宗教は，普遍的真理に立つが故に，歴史の未来を開拓する役割を果すものであると著者は確信する。人間を，綜合的なそして多国籍的枠組のなかで，希望をもって，他者と共に生きるように意義づける内的な力として宗教を認めている。そこに，真の宗教の予言者的役割を論じている。これらの方向は，カトリック教会では，第二ヴァチカン公会議で語られ，プロテスタントやオーソドックス教会では，世界教会協議会の第5回大会であるナイロビ会議などで打ち出されている。また，世界宗教者平和会議などの運動のなかに反映されている。

著者が説くところは，現実の国家を否定して，無政府主義をいうのでないし，直ちにユートピアを志向するのでもなく，国家を通して民衆が新しい多国籍的連繋を強化し，暫進的に国際的秩序を構築するという方向である。宗教は，新しい価値観を支え，未来に対する希望と忍耐を与え，民衆と民衆を結びつけるものとして，きわめて重要な役割を果すというのが著者の中心的な確信である。

国際と人際

わが国も他の国ぐにと同様に，「国家安全保障」の拘束服をぴったりと身につけている。オイルショックによって石油をはじめとする資源問題は，この拘束服が国際的連繋なしには不充分になってきていることが明白となりつつある。日本の防衛は，多少の防衛力を増してみたところで，日本自体で処理出来ない課題である。さらに，日本は経済的に存立するためには，どうしても国際的貿易収支の均衡を保たねばならない。敗戦後日本が今日のような経済的振興をしたことは，たしかに一面においては，日本人の勤勉や協力にもよることと思うが，他面には，かなりの偶然的僥倖にもよるのであって日本人は，謙虚に現状を省み，人類の中における相互連帯性に眼をむけて生きてゆかねばならない。80年代

というのは，まさにそのことが問われる時代であろう。こうした課題をかかえている日本人にとって，本書は，現実的な視点と共に，説得力のある素材を提供しているのではないかと思う。なお，本書は，広島大学において教育学を講じられたのち，現広島電気大学教授松田義哲氏御夫妻によって訳出され丸善から近く出版される予定である。（竹中正夫）

紹　　介

「淀川教会20年の記録」

淀川教会編集委員会　1978年発行　B6，264頁

日本基督教団淀川教会の牧師森喜志雄氏から，「一つの教会が独立するのにどんなに多くの人々の祈りや献げものがあったか痛感します。感謝をこめて贈呈致します」との手紙とともに，「淀川教会20年の記録」が送られてきた。高知より移住された古田金代さんが日曜学校を始められたのが，この教会の発端であるが，それは昭和15年ころのことであった。そして戦後天満教会の上新庄分校となり，昭和31年天満教会創立80年の記念事業の一つとして上新庄伝道所の伝道強化と独立があげられた。それから2年後淀川教会は独立した。従ってこの教会の伝道開始から設立にいたるまでは，ちょうど戦前，戦中，戦後の最も日本の困難な時期であった。

森喜志雄氏，沢田泰紳氏，工藤弘志氏，石田正弘氏，平岡とみ氏の五人の牧師による回想録のあとに，教会20年の歩みの詳細な資料が収録され，また古田金代さんと浜田富美さんの信徒の証しが掲載されている。

森氏の回想録には，きわめて示唆に富む牧師の心構えと務めについても記されており，興味深い。沢田氏のものには，教会像についての見解が記されており興味深いが，ことにこの教会の教会学校教師仲間で教案研究会を開き，独自の教材を作成したという点は，沢田氏の独創性がうかがえて示唆に富む。そしてこのころの教師のなかから，やがて教会を支える多くの信徒が生まれたとのことである。教団の宿河原教会牧師石川孝司，兼子ご夫妻もこのころの教師であった。

古田氏と浜田氏の証しは，生々しい体験談に満ちており，それだけに神の恩恵への感謝が読者に伝わってくる。

本書には，50年後，100年後の教会史編集のためにと，多くの貴重な資料が収集されている。それは単なる記録の列挙ではなく，牧師や教会員の祈りや希望が多くの文章によって記されている。20年間の礼拝の記録もある。

日本キリスト教史の観点から，この書は天満教会の発展との連関できわめて貴重である。また戦前，戦中，戦後の牧師と信徒が，地域社会への福音伝道と奉仕にどのような働きをしたかが詳細に分かるえがたい資料である。